

1890年代の岡山孤児院における音楽事象と「人間教育」

— 先駆的器楽教育実践の近代音楽史における位置づけを目指して —

1890's Music Phenomena in the Okayama Orphanage for the Education for Human Growth

— For Preparing to rank the Okayama Orphanage Music Band as the
Pioneer of the Instrumental Education in Modern Times in Japan. —

人間教育学部人間教育学科

山本 美紀

YAMAMOTO Miki

Department of Education for Human Growth

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：石井十次，岡山孤児院，音楽隊，東洋救世軍，音楽教育，メソジスト

Abstract : Ishii Juji (石井十次 1865-1914) is a very famous person as the Pioneer of the social welfare worker in Japanese modern times. He founded and managed the Okayama Orphanage (1887-1926). Especially, the national tour of the Okayama Orphanage's Lantern and Brass Band had a great impact on the general public in Japan.

In this essay, I firstly conducted a research on the musical phenomena of the Okayama Orphanage. The results follow. 1. Ishii considered The Okayama Orphanage Brass Band as a separate organization from The Eastern Salvation Army's Brass Band. 2. The Eastern Salvation Army was different from The Salvation Army. 3. The Okayama Orphanage Brass Band didn't model the Salvation Army's Brass Band. 4. Although the Okayama Orphanage in the 1890s used music as a signal or a commercial purpose, it wasn't the special manner in that time. 5. The Okayama Orphanage Brass Band gave the image for the junior orchestra.

Additional research on music situation in The Okayama Orphanage Brass Band or Lantern Brass Band is needed more close investigations with their music materials such as music notes, their concert programs, and so forth. It will illustrate the development of the "music education" and "music scene" in modern Japan and, the intellectual influence between Christianity and traditional Japanese religions.

Keyword : Ishii Jyuji, Okayama Orphanage, Brass Band, the Salvation Army, Music Education Methodist

I. はじめに：研究の発端と音楽教育的側面についての仮説

岡山に由来する研究を対象とした研究助成をきっかけに，岡山孤児院で行われた「音楽幻燈隊」に関わる一連の事業及び活動について，教育史的観点からのアプローチを試み，その成果として「岡山孤児院音楽幻

燈隊にみる音楽教育的意義 —日本にもたらされた音楽教育の多面性—」（公益財団法人両備櫻園記念財団平成26年度研究助成）を上梓した。

周知のように，岡山孤児院についてだけでなく，その音楽幻燈隊については多くの先行研究が存在している。音楽幻燈隊は1898（M31）年から全国巡回を開始するが，そのいきさつから，これまでの岡山孤児院

音楽隊については慈善事業や孤児院事業，さらにはメディア論の視点から研究されてきた。それら先行研究の中に，例えば一色哲による「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院」や，細井勇による『石井十次と岡山孤児院』における「慈善音楽幻燈隊」の扱いはある。一色哲は音楽幻燈隊の全国的な活動と，それを可能にした「ネットワーク」に注目したものである。それによると，音楽幻燈隊は「外部運動」に組み込まれており，まずは「音楽隊」が孤児院の運営資金集めに利用され，その後「大挙伝道」に使われることを契機に「音楽隊」と「幻燈会」が結び付けられて，組織だったものとなったという（一色 1995：52 - 53）。また，大挙伝道に利用されるようになってからの活動は『孤児院新報』の記事から，1902（M35）年の一年間だけでも三十四の都市を数え，それぞれの都市に最大 20 名もの「発起人」を立てていたとし，岡山孤児院を支援するネットワークの存在を指摘している。一方，「音楽幻燈隊」の活動を「岡山孤児院事業」としてとらえた細井は，1900（M33）年から 1903（M36）年の音楽幻燈隊（慈善音楽幻燈隊）の活躍によって，寄付金集めの目途がついたとする（細井 2009：305）。

これらに共通することは，音楽幻燈隊が組織的に活動することを始めた 1900 年以降に注目している点である。それは，石井十次が本格的に音楽幻燈隊の巡回に関わったのが 1900（M33）年から 1902（M35）年にかけてであり，「慈善音楽幻燈隊結成趣意書」など，比較的是っきりとその活動がつかみやすいためと考えられる。確かに，音楽隊や幻燈隊の活動が，有力な集金マシンとして機能することを石井が期待し，音楽幻燈隊がその期待に応えたことは事実である。しかし，石井十次の孤児院運営は何よりも孤児の教育である。ただ「養う」だけでも，自分の商売とするためでもない。エミールに傾倒する彼のキリスト教思想的である「孤児の救い」も，「人間教育」が成ってこそ達成されるものである。

先にあげた先行研究には，音楽幻燈隊についての石井の教育実践的見地，特に当時の音楽教育との関わりから検討がなされてきたものはなく，その活動を「音楽教育的」「音楽教育史的」観点からの研究が十分になされてきたとは言い難い。それは，音楽幻燈隊の活動が，公演のみ，あるいは，社会に与えたインパクトや影響を注目して研究されてきた結果，もっぱら日本におけ

る近代的な慈善事業・児童養護の先駆的事例として受け止められてきたためであると考えられる。そこで，音楽幻燈隊の活動を，石井が当時持っていた教育思想的・倫理的教育理念を踏まえて検討するならば，そこに彼が音楽教育を通して実現しようとしたことや，紹介されていた様々な教育思想の音楽教育面での日本の展開を確認できるのではないかと仮定したのである。

しかしその目論みは見事に外れた。そして，岡山孤児院音楽隊が，当時の最先端に行く西洋音楽受容状況の様々な側面を反映する，ミラーボールのような体を為していたことが見えてきたのである。本稿では，岡山孤児院において音楽幻燈隊活動の前提となる背景を，関わる多様な先行研究の検討及び，今日の近代音楽史研究の成果を踏まえながら明らかにすると共に，岡山孤児院音楽隊を舞台に展開する，近代日本音楽教育史と近代音楽史，及び近代日本宗教史研究のトライアングルな状況が持つ研究課題について示すものである。

Ⅱ. 岡山孤児院の音楽隊に至る音楽に関する記述と背景

i. 先行研究の検討：「東洋救世軍音楽隊」

菊池義明は先行研究である「岡山孤児院の音楽幻燈隊（活動写真隊）の活動と養護実践のかかわり」において，「便宜的に」と断りながら岡山孤児院音楽隊の活動時期を 6 期に時期区分している（菊池 1997，70-71）。その分類は，音楽幻燈（活動写真）隊の開催地数と総純収益の変化，活動地域の拡大の動向を総合的に判断したもので，第 1 期が 1893（M26）年 11 月 - 1897（M30）年 12 月，第 2 期が 1898（M31）年 1 月 - 1899（M32）年 12 月，第 3 期が 1900（M33）年 1 月 - 1903（M36）年 2 月，第 4 期が 1903（M36）年 3 月 - 1905（M38）年，第 5 期が 1906（M39）年 1 月 - 1908（M41）年 8 月，第 6 期が 1908（M41）年 8 月 - 1911（M44）年 11 月となっている。このうち，本稿では，第 1 期を中心に，他分野での研究成果を反映させるために，その前後の時代を扱う。

菊池がこの 1893 年 11 月を第 1 期のスタートと見るのは，その時期に音楽隊（風琴音楽隊）が設立されたこととみなしているからである¹。実は，このころを音楽隊の設立と見るのは微妙である。菊池が根拠とする『岡山孤児院月報 第四号』（以下『月報』）には，

本日ハ宣教師ペター氏等ヨリ金拾五圓東洋救世軍樂隊ノタメトシテ寄付セラル因テ本日婦神セラレシ風琴音學會長三谷寅之助君ニ風琴其他樂器ノ買入方ヲ委託セリ

(岡山孤兒院『岡山孤兒院月報』第四号, 1893 (M26)年, 7面 1893年11月20日)

とあるが、それはあくまでも「東洋救世軍樂隊」のための献金であった。このころの石井は、東洋救世軍についての構想に明け暮れており、「孤兒院事業」と「東洋救世軍構想」は別のものとして考えていたふしがある。というのも、同じ『月報』で石井は、「今マハ孤兒院設立以来未曾有ノ困難ナリ」とはっきりと書いており(同前9面)、さらに日ごとの収支を「本日収入金／支出金／不足金・残金」という具合にすべて記載しているが、そこにこの金額を組み込んでいないのである。ペター等宣教師からの東洋軍樂隊樂器購入のための献金のあった当日は、「明朝迄ノ米代ニハ尚ホ三、二二四ノ不足ヲ告グ」(同前)とまでである。

同一人物による2つの事業「孤兒院運営」と「東洋救世軍」が並行して走っていたとみなしてよく、ということはこの時点で岡山孤兒院のなかでも音楽隊は、実態として未だぼんやりとした状態であったことがうかがえる。だから、この時点で言えるのは「風琴」の演奏を聴いて感動した(あるいは、伝道に役立つと直感した)石井が、風琴を入手できるように宣教師に働きかけ、結果、風琴と他の樂器がいくつか購入されたということのみであり、それが孤兒院において「孤兒院付属の音楽隊」としてはっきりと存在していたとまで断言するのは難しい。それを確定するには、樂器や樂譜がそろっていく状況、レッスンや公演のレパートリーや所蔵樂譜などを総合的に検討することが必要になる。

ii. 孤兒院孤兒院音楽隊黎明期(1892 (M25)-1893 (M26)年)における音楽的事象：石井十次の「音楽」概念

とはいえ、「風琴」購入までに岡山孤兒院において、音楽的な事象がまったく無かったというわけではない。1892 (M25) 2月13日付『日誌』には「(二) 喇叭卒に院内巡吹を命ず」とあり、さらに1893 (M26)年8月29日付の『日誌』には、「(一) 五時の喇叭をききて起床」とあるように、起床喇叭によって1日が

始まる様子が書かれている。この「喇叭」の院内での用い方について、石井自らが「[月報] 第四号(十一月二十日発行)によれば(十月中記事)」として、同年大晦日の日付の日誌にまとめて書いている。

五時の鳴鐘は忠実に喇叭手を喚起す彼等蹴起して衣帯を固め喇叭を手にして嚙嚙たる数声起床を促しつつ院内を一巡す - 中略 - 全六時食事喇叭の響くや九組に分かれたる男女各其組に応じて食に就く三十分にして集合喇叭朝礼拝を報す - 中略 - [朝礼拝中]「気を付け」の喇叭にて会を始め讚美の後に - 中略 - 全九時就床喇叭は凄寂たる其音調を以て一同を眠に導き院内肅然として又人語なし
(岡山孤兒院『石井十次日誌(明治二十六年)』, pp.377-378, 1962年)

このことから、まずは喇叭が院内の時報(シグナル・合図)として使われていたことがわかる。ここで注意しておきたいのは、就床喇叭に使われたのは「凄寂たる其音調」とあることから、一定の長さのある、おそらくは短調のメロディーであったのだろうということだ。また、喇叭が「隊」をなすものであったのか、それとも「喇叭手」が当番制で、当番に当たった者が順繰りに一人で担当していたかなどは不明である。

「音楽隊」であることには、少なくとも数人が同時に「合奏する」という状況が必要であるが、それに相当するのは、前年1892 (M25) 10月29日付けの日誌にある「喇叭隊四名が君が代を奏す」との記事である(272)²。ただ、この「喇叭隊」が常設のものであったかどうか、あるいはこれをもって即「音楽隊」を結成したと見なすのは、上記のような理由から難しい。

1892 (M25) 当時、石井はすでに「救世軍」という言葉に心酔していた。そのため、伝道活動はあたかも軍隊の進軍のように表記され、伝道チームは日誌の中でもっぱら「軍隊」と表現される。例えば、10月29日付の日誌には「軍隊は市内に弾丸を配布、女子三人は田舎に向かって進撃」とあり、今風に翻訳すると「伝道チームはトラクト(キリスト教についてのパンフレット)を配布、女子3人は田舎に配りに向かった」である。そう訳せるのは、この日に「東洋救世軍最初の野外説教」が行われたとあるためである。救世軍が実際に動き始めるのは、まだまだ後のことであり、実際にライト大

佐以下が横浜に上陸するのは、1895（M28）年のことであるにもかかわらず、日誌の中の「軍隊」はもちろん「(東洋) 救世軍」をさす。この日行われた東洋救世軍最初の野外説教では音楽の記載が日記になく、音楽が使用されなかったのか、石井の印象に残らなかったのはわからない。ここからわかることは、伝道隊の前提が「軍隊」（この場合は救世軍）をイメージしたものであり、「孤児院音楽隊」の前提として軍楽隊が想定されていたことである。しかしその軍楽隊は、救世軍が日本に本格的に入ってくる以前の話であり、先行研究にも引用されている山室軍平の「石井君も此の書物〔W. ブース著『最暗黒の英国とその出路』〕によりて啓発された処がだいぶんあつたものらしい。- 中略 - 又孤児院に楽隊を設けたなども、此の書に学んだことであつた」（山室 1987, 428）との言葉があつても、楽隊萌芽期には救世軍の一大特徴である救世軍軍楽隊“Salvation Army Brass Band”の直接的な影響下になかったということである。では、石井の軍楽隊のイメージとは何であつたのか。風琴音楽隊については、その言葉が1896（M26）年の秋以降に日誌や月報に出ているわけではない。風琴購入の依頼が1896（M26）年の10月、その直後11月3日の天長節での祝会で演奏されたのが、「君ガ代喇叭」と「風琴」と別々にプログラムに掲載されていることから、1896（M26）年の11月時点で風琴音楽隊があつたと見るのは時期尚早なのではないか。もし認めるとするならば、「音楽隊」とする定義を考え直す必要がある。つまり、岡山孤児院音楽隊はあくまでも今日的な「楽器の合奏」とみるのではなく、個々の楽器が個別に各曲を演奏するスタイルも「音楽隊」と評していた、つまり「楽器を伴った伝道チーム」を「音楽隊」とみなしていた、ということである。

このことから石井の音楽の使い方についてもう一つ言えることは、石井が音楽を宣伝の際の注意喚起（「呼び込み」）に使っていた、ということである。これは菊池も指摘しているように、比較的早い段階から実行されていた（菊池 1997, 72）。

〔1893（M26）年7月16日付〕此ノ財政困難ノ際ニ当テ昨日ヨリ夏期学校ヲ始メ各所ヨリ多クノ金ヲ与ヘラレタレバ早天ニ佳雨ヲ得タルガ如キ喜ヲ以テ全院ノ感謝会ヲ開キ而シテ感謝ノ供物トシテ院内伝道軍ノ一

隊ハ一枚摺ノ説教ヲ彈丸トシ草鞋脚半ニテ炎天ヲ犯シ旗ヲ翻ヘシ唳々タル喇叭ヲ吹キ市内伝道ヲ始メ一枚摺ノ説教ヲ配布シ或ハ路傍説教ヲナシ壯快ナル運動ヲ終ヘテ婦院（岡山孤児院『岡山孤児院月報』第一号, 3面 1893（M26）年8月15日）

〔1893（M26）年7月18日付〕午後二時ヨリ三十余名隊ヲ組ミ喇叭ヲ吹キ上道郡倉柳村マデ伝道ニ行ケリ（同前, 一面）

Ⅲ. 岡山孤児院音楽隊の近代音楽史・音楽教育史における位置

i. 影響を受けたと考えられるもの

ここで、岡山孤児院音楽隊の近代音楽史・音楽教育史における黎明期からの位置づけを、影響を受けた、あるいは与えたと考えられる1) 思想領域と2) 近代音楽・音楽教育史の関わりで考えてみる。

i) 思想的影響

考えられるのが、ウィリアム・ブース『最暗黒の英国とその出路』と、ルソー『エミール』である。この2冊の本の影響の大きさは、それぞれとの関わりについてさらに先行研究があることからわかる。しかし、ここで指摘しておかなくてはいけないことは、石井がこの2冊を自らが直接「読書」したわけではなく、それぞれ訳してもらいながら、あるいは注解してもらいながら「読み聞かせてもらった」ということである。

年表を見るとわかるように、1891（M24）年2月20日に、石井は初めてW. ブースのことを『聖書之友』三八号に掲載された「救世軍のおんな將軍ブース夫人伝」と、『六合雑誌』第一二二号（1891年2月）に掲載された植村正久による「將軍ブース氏の廢人利用策」の、両記事を通して知ることになる（室田 1998, 100-101）。ここから急速に救世軍に傾倒していく様子が『日誌』から窺えるが、実際にブース將軍の代表的著作“In Darkest England and The Way Out”（1890年：邦題『最暗黒の英国とその出路』）を入手するのは、青木要吉により翌年1892（M25）年1月2日のことであり、さらに読み聞かせてもらうのは山本徳尚から5月4日になる。今よりもずっと洋書の入手に手間取るとはいえ、ブースを知ってから、直接本を手に取り読んで聞かせてもらうまでに1年あまりかかっている。

『日誌』によれば、救世軍とブースへの傾倒（想い）は、この間も途切れることなく、むしろ現実を帯びた、神に与えられた使命として熱を帯びていくのである。

このあたりのことは、先行研究者姜が石井の思想のつかみ方の特徴として、以下のようにやや厳しく指摘する点でもある。

また余り読書しないのも石井の特徴である。毎日のように瞑想にふけているのに対し、読書の数が少なく、- 中略 - 教会の説教などから得た知識化、小冊子でも弟子さんや学生に読み聞かされたものが多かった。

一方、こうした狭い情報源から得た半端な知識を宗教的靈感（インスピレーション）によって加工し、自らの信仰に活かす吸収、消化の能力が高く、さらにそれらをすぐさま行動に移す決断力が誰よりも優れていた（姜 2005, 142）

さらに姜は山室軍平の石井十次追悼文から引用する。

「眼光紙背に徹する読書力、又は理解力」- 中略 - 「ちょっと本を見たこと、他人から聞いた事などの中からその要領をとらえ、いつでも自分の事業を經營するに足るだけ、或はそれ以上の極めて適切なる見識を作り出されたのである」（山室軍平「石井十次追悼の説教」『慈善』第4号1914年4月より。姜論文の再引用、p.142）

今でこそ「日本救世軍の父」といわれる指導者としてゆるぎなく立つが、そもそも山室が救世軍を知るきっかけとなったのが、石井十次である。石井がブース『最暗黒の英国とその出路』を最初に読み聞かせてもらった時に山室軍平が同席しており、石井の働きを手伝うことで救世軍を担うことになったいきさつは、山室本人が認めるところであり、よく知られていることでもある（室田 1998, 109）。

石井十次君は痔の手術を受くために、上京して同志社病院に入院せられた。- 中略 - 其の少し前に石井君の友人某氏〔青木要吉〕が米国から救世軍の創立者、大将ウイリアム・ブース著「最暗黒の英国及びその出路」という一書を贈り、「此は目下欧米諸国で大層評判の高い書物であるから、一部贈呈する」というて来た。そ

こで君は其書物を携えて入院し、同志社の学生にて英語に堪能なる山本徳尚君といふ人に頼んで、毎日之を其の枕許で訳読してもらい、私は又毎日出かけて行つて、其聞書を作ることとなつた。（山室 1929, 122-123）

実際、ここに限らず『日誌』を読んでいくと、石井の熱狂主義的、さらには他者と自分との境界が容易に超えられていく感が否めない。例えば少し後にルソー『エミール』を読み聞かせてもらった際には「アア『ルソー』先生予が心中に蘇り来れり否な予が経歴は殆ど先生の経歴を繰歸したるが如し 否余は日本に於て先生に由つて示すされたる教育の真理を実行せんがために造られたるものなりと覚悟せり」というところまで一気に行ってしまう（『日誌』1894（M27）年3月9日付）。しかしだからこそ、近代的孤児院事業にも乗り出し、上記のように山室軍平を感化し、後の大スポンサー大原孫三郎などといった大物の心もつかみ得たのだとも言える。

ここで、ウィリアム・ブース『最暗黒の英国とその出路』において、音楽についてどのような記述があるか、少し長いが引用しておく。

諸君はもちろん、いくらかでも持ち金のある限り、救貧院の「浮浪者收容所」へは行き得ない。諸君は私ども〔救世軍〕の簡易宿泊所の一つにやってくる。- 中略 - 八時になると簡易宿泊所はかなり一杯になる。そこで私どもが全事業の中での欠くべからざる特色と見なすものが始まる。- 中略 - 彼ら〔簡易宿泊所の利用者〕は大抵お互いに見知らぬ間柄である。彼らはことごとく貧乏に悩んでいる 一君なら彼らをどうするか。私どものやり方はこうである。

私どもは元気のいい救霊集會を催す。その施設の主任士官は、「救世軍士官学校」から配属された人々に補佐されて、快活な肩のこらない社交的な夕べを指揮する。婦人らはバンジョー（五・六弦の弦楽器）やタンバリンを持っていて、二時間くらい諸君はロンドン中でも珍しい陽気な集會に列する。祈祷があるが、短くて要を得たものである。講話があつて、人々は、その席に立ち上がつて彼らの仲間に自分らの経験を語る。- 中略 - 私どもの集會に出席した人は誰もが証言する如く、

決して長たらしくなく、信心ぶらず、気取らない話であり、個人的経験の素直な告白である。一心情のこもった旋律が響きわたる。集会の指揮者は、前の話し手の述べた経験を表すような聖歌を一、二節歌いだす。あるいは士官学校から来た娘らの一人が器楽の伴奏つきで独唱し、折返しになると一同が威勢よくはしゃいでこれに加わる。

私どもの宿泊者らの誰一人として集会への参加を強制されない。集会がすむまでこなくても差支えない。しかし解りきった事実ながら、彼らはやってくる。どの夜も八時から一〇時の間これらの人々がそこに座って、勧告に耳を傾け、歌に加わっているのを諸君は見出すであろう。疑いもなく彼らの中の多くは、あまり共鳴はしないが、それでも出席して音楽や暖か味に接することを好み、そしてかりに単なる好奇心によるにせよ、述べられるさまざまな証言によって、かなり感動する。(ブース 1987, 126-127)

私は其の男〔貧しく人間らしい扱いを受けていない人〕を引き受け、強い腕をもって彼を支え、彼が殆んど窒息させられようとしている泥沼から、彼を脱出させることを提案する。- 中略 - 「君は飢えている、ここに食物がある。- 中略 - 君がこれらをすませた後に、盛んな集会が営まれ楽しい音楽と心温まる人間の交わりがある。」(同前, 137)

彼〔牧師だったがアルコール中毒で職を失い家庭崩壊した人物〕はもう一度集会へ戻ったが、また途中で出て居酒屋へ向かった。彼は落ち着けないうで、三度目に〔救世軍の〕軍営に戻った。彼が最後に入っていくと、兵士らは歌っていた―

はかりしられぬ　　ふかきめぐみを
おもえばわれは　　つみいとおもし³

この歌がさらに深い感銘を与えた。- 中略 - 長い苦闘の後に、希望が湧き、彼は跪いて、罪を告白して、救いを得た。(同前, 230)

このように見てくると、救世軍の音楽の使い方と石井が岡山孤児院でのそれとでは、大きな違いがあることがはっきりする。さらに言うなら、それぞれの活動において「音楽」の占めた位置や意義は、まったく別物なのである。これだけ違えば、先行研究中に引用さ

れている、1907 (M40) 年ブースが岡山に来た際に石井が『日誌』に以下のように記したのは当然である。

[1907 (M40) 年 5 月 15 日付] 一、とても日本人は『ブース』式には救はれぬ - 中略 - 四、よーまーあんなことが真面目にやれることじゃ (『日誌 明治四十年』80 頁, 1977 年)

ii) 音楽的影響

創始者ブース大將がもともとはメソジストの牧師であり、そこから分派した生い立ちをもつ救世軍の音楽は、『最暗黒の英国とその出路』に出てくる内容を見る限り、ジョン・ウェスレーの音楽の使用法に忠実に従っている。メソジストの音楽は、「センチメンタルで情緒に訴えがちである」とよく評されるが、まさに救世軍の音楽の利用がそれである。

ジョン・ウェスレーはすべての教会での説教を国教会から禁じられたとき、「路傍伝道」をはじめ、その際「熊使い」や「闘鶏」の呼び込みに倣って、まず音楽で引き寄せた。確かにその点においては、伝道隊の「呼び込み」に喇叭を使用した石井十次のやり方とそれほど違わない。しかし、後にウェスレーが『讚美の心得

The 'Directions for Singing』と題した文章を、自らが編纂した讚美歌集に付けるようになったのは、讚美することや讚美歌（歌詞と旋律 Tune）に、多くの信徒教育につながる機能を組み込んだためである。(山本 2014)

このことから、救世軍の音楽、中でもプラスバンドの意義は、石井の理解の範囲を超えるものであったことは明らかである。ここでは、石井が本を「読み聞かせてもらった」ということを考慮することも必要だろう。音楽的内容が書いてあったとしても、それが具体的にどのようなことをさしているのか内容が読み取れなければ、読み手に割愛されたり、聞き手が聞き流してしまうことは十分にあり得る。海外経験の無い石井にそれほど豊富な種類の音楽体験があったとは想定しにくい。まして、石井の周りにあった「楽隊」と名のつくものは、市中音楽隊が最たるものであっただろう。明治期の吹奏楽の多様化について書いた三枝の説明は、以下のようなものである。

一八八七年（明治二十年）前後、近代化・西洋化が奨励されたにもかかわらず、西洋音楽は民間になかなか浸透していかなかった。時代は下がるが、例えば一九三〇年代になっても、ラジオ番組で圧倒的に支持されていたのは浪花節や講談、落語であり、西洋音楽がまだ違和感を持って受け止められていた事実からもうかがい知ることができる。-中略-

一八九〇年前後（明治二十年頃）から吹奏楽で登場した市中音楽隊にはかなり質のいいものもあり - 中略 - ジンタ（市中音楽隊）は主に広告の町回りに使われていたが、例えば、八六年（明治十九年）十一月に設立された最初の民間吹奏楽団・東京市中音楽隊は園遊会・祝賀会・運動会・開業式などの出演依頼も多く受けたし、海軍軍楽隊出身者を中心に結成された東洋市中音楽会も単なる広告宣伝をおこなうチンドン屋のような民間吹奏楽団を超えて、演奏会用の吹奏楽団として活動した。しかし、一九〇〇年頃（明治三十年代）になると、市中音楽隊はすっかり質が低下して低俗なジンタに陥り、さらに日露戦争後、ロシアとの戦後処理をめぐって焼き討ち事件などの社会的事件が起こると、多人数での街路行進が制限され、明治の末年頃、市中音楽隊はついに解散してしまう。

（三枝 2013, 33）

これは中央においての吹奏楽の状況であることを勘案すると、岡山の状況は「演奏会用の管弦楽団」は難しくても、ちょっとした楽隊が広告の町回りに使われていた、という状況はあったかもしれない。一般市民の間で「音楽隊」と呼ばれるものの活動がこのようなものだった時代に、本の読み聞かせで理解した内容が、本来の救世軍軍楽隊の音楽活動と大きな違いがあったことはいわば当然である。このことから、「東洋救世軍」の名前に惑わされて、直接的に「救世軍軍楽隊」につなげることは問題があり、いくつかの先行研究において、安易に「東洋音楽隊の影響を受けて」とされていても、実態を検討し始めたならば、そう簡単にいけないことがたちまち明らかになる。そして、石井の「音楽」や「音楽隊」の受け止めも、現在の「音楽」や「音楽隊」とは隔たりのあるものであった可能性が出てくる。

岡山孤児院音楽隊が、「音楽隊」として実際に何をしていたのか、あるいは西洋音楽の担い手として近代音楽史の中でどのような位置をしめていたのかを明確に

するためには、今後さらに、使用された楽譜や公演内容と、市井での他の音楽活動との総合的な検討が必要になってくる。

ただ、ここまでの研究で、石井十次の岡山孤児院音楽隊に通じる音楽の用い方に認められるのは、救世軍の影響というよりもむしろ市中音楽隊に通じる、効果的な宣伝方法である「音楽隊」の利用価値である。それは、救世軍などの影響を受けていない、日本の庶民のかなり特異な西洋音楽受容を反映した、独自の展開をなす音楽隊であったはずである。なぜなら、年表にも示したように、救世軍が日本に入ってくるのは、1895（M28）年9月のライト大佐率いる救世軍の来日からであり、それまではいわば石井以下「勝手連」状態で日本版救世軍としての、「東洋救世軍」を進めているからだ。

ii. 影響を与えたと考えられるもの

日本においては、岡山孤児院音楽隊は「影響を受けた」というよりもむしろ「影響を与えた」とことの方が多い音楽活動であろう。年表にもあるように、岡山孤児院音楽隊の黎明期はスクールバンドの興隆期の中でもかなり先駆的な時期であり、さらに孤児院音楽隊の終わる1911（M44）年末頃は、ようやく三越少年少女音楽隊を初めとした「少年少女」の「音楽隊」が活動を開始する時期なのである。

明治の松江市の音楽活動を「楽隊」に焦点を当てて緻密に追った上野は、その論文「明治期末の松江市における音風景について―楽隊の普及との関連から―」の中で、岡山孤児院の松江公演のことに触れている。

明治期における松江市の音楽文化の状況は不明なことが多いが、明治31年（1898）6月に岡山孤児院の巡回幻燈会が行われている。おそらく、大きな影響を与えたに違いない。この当時、余興とはいえ、当地において楽隊の演奏は極めて珍しいものだったからである。-中略- おそらく街中に噂が広まったのだろう。会場は人であふれた。「彼の岡山孤児院の基本金募集幻燈音楽隊は去四五の両夜天陣栄座において幻燈音楽を催せるか 聴衆は殆んど立錫の余地なかりし」-中略- 2回公演を考慮すると、相当多くの人が楽隊の演奏に触れたのではないだろうか（上野 2010, 20）

このことから推測されるのが、「子どもによる音楽隊」のイメージを、全国ツアーによって岡山孤児院音楽隊が定着させたということである。少年少女音楽隊の勃興はそれによるものであり、やがては宝塚少女歌劇へとつながっていく。

IV. 終わりに：岡山孤児院音楽隊の内包する、近代西洋音楽受容の諸相の可能性

本稿では、岡山孤児院音楽隊の黎明期を中心として、先行研究を踏まえながらその音楽的背景に何が考えられるかについて考察してきた。その結果、以下のようなことが明らかになった。

1. 1890年代初頭、石井の中では、岡山孤児院音楽隊と東洋救世軍軍楽隊は別組織としてあったこと
2. 東洋救世軍と救世軍は別であること
3. ブースを知った時期と「東洋救世軍」構想に集中していた時期だからといって、必ずしも救世軍軍楽隊がモデルになっているわけではないこと
4. 1890 (M20) 年代前後の岡山孤児院における音楽の使用が、以下の理由から当時の日本の音楽的状况から特別突出したものではないこと。
 - ① 孤児院黎明期において音楽は「シグナル」であり、伝道の「呼び込み」であり、今日的な意味で「音楽を楽しむ」「美しい音楽を奏でる」というイメージはほぼ無かった。
 - ② 「音楽」と「音楽教育」についての受け止めがほとんどなかった（あるいは、現代とかなり違いがあった）こと。

特に②については、現代の音楽教育の中でも、その痕跡が未だにはっきりと残っている。音楽教育が扱う内容には①情緒に働きかける音楽と、②シグナルとしての音楽があり、絶えずせめぎ合って今日まで存在してきた。幕末から明治時代にかけて、近代音楽の教育、主に器楽では、②の位置づけが強かったと言えよう（奥中 2002, 2012）。石井の場合、①②の間がかなり乖離していたと考えられる。これは、後で少し触れることになるルソー『エミール』との関連でも言えることであるだろう。
5. 1894 (M27) 年以降の音楽幻燈隊が、後の少年少女音楽隊への前提的イメージに成り得たこと

しかしながら、岡山孤児院音楽隊の音楽的内容をめぐる最初の論考でもある本稿の意義としては、今回語られていない事柄をはっきりさせておくことに意味がある。それは以下のような事柄である。

1. ルソー『エミール』と岡山孤児院音楽隊の関わり

年表にもあるように、石井がエミールを初めて知ったのは 1894 (M27) 年であり、音楽隊が勢いを増していく時と重なっている。しかし、石井が『エミール』から受け取った教育思想と、軍隊式音楽の有り様には隔たりがある。ルソーの教育は、よく言われるように「桑木教育主義（桑木の教育）」であるのに対し、孤児院や音楽隊の実際は「軍隊式」であるのはなぜか。また、ルソーは終生音楽家（音楽教師）であり、『エミール』にも音楽的内容が前半部分に多く扱われているにもかかわらず、まったく触れていない。あるのは、「音楽は情操によい」という小野田の話のみである。時間的に後にエミールを知ったとはいえ、それが全くつながらないのは不自然である。しかも先述したように、音楽に関する項目はエミールの前半部分に多く扱われている。これは、解釈を加えて読み聞かせるていた主体、あるいは聞いていた石井が、音楽的内容の見当が付かなかったか、あるいは「音楽」というものの受け止めがかなり限定的であった可能性がある。

2. 幕末以来の軍楽隊、ジンタ、市中音楽隊など、市井の音楽状況（特に当時のブラスバンドの状況）との、レパートリーや楽譜の所蔵、レパートリー等の比較検討。

3. 日英の救世軍軍楽隊の歴史研究をふまえた考察

4. キリスト教他派の音楽状況をふまえた考察。中でも特に組合教会系の宣教師、オルチンが岡山孤児院に関わったことは記録に残っており、彼の幻燈公演会やレパートリーなどを踏まえた研究、また大挙伝道との関連を証明しなくてはならないだろう。

5. 当時の他宗教との影響関係

上記については今後、楽譜や公演録の検証によって、明らかになっていくものである。また、その成果は、未だ研究されていない、キリスト教器楽音楽の日本の近代器楽音楽に与えた影響や、逆に、日本で宣教師が伝道活動を行っていく中で日本独自の展開があったのかなかったのか、など相互的影響過程について明らか

にするにちがいない。

さらに、本稿が触れていないことについては、岡山孤児院における音楽隊活動のきっかけがあるが、これはいくつかの先行研究ですでに言及済みであるため、今回触れなかったことである。ただ、先行研究において音楽隊が「喇叭隊」→「音楽風琴隊」→「音楽幻燈隊」→「音楽活動写真隊」に変遷していったというのが定説であるが、音楽や映像関係の専門家が検討したわけではないため、名称の変遷がそのまま実態を反映しているとは限らない。これを確定するには精査が必要であろう。

いずれにせよ、本稿で明らかになったもののうち、最も意味深いのは、岡山孤児院における音楽活動や音楽隊の活動が、当時の市井で行われていた庶民の音楽状況や、その理解を反映したものであるということ、さらにその後の様々な音楽活動やより広がりを持った音楽教育のイメージの前提と成り得たことである。今後岡山音楽幻燈隊における「音楽事象の分析研究」を進めていくことにより、現代に至る公的機関による「音楽教育」や「音楽観」の構成要素の分析とその構築過程（近代以降の日本人の音楽概念構築）の過程、さらにキリスト教会と日本の既存宗教とその音楽や教育への相互影響の解明がなされていくであろう。

〈主要参考文献〉

- ブース、ウィリアム『最暗黒の英国とその出路』山室武甫訳、相川書房、1987
- 長谷川博史「J・J・ルソーにおける音楽と人間」『紀要』第14巻 聖徳大学 185-215, 1981
- Holz, R. Ronald. Brass Bands of The Salvation Army: Their Mission and Music Vol.1 England, 2006
- 細井勇『石井十次と岡山孤児院』ミネルヴァ書房、2009
- 石井十次『石井十次日誌（明治二十五年）』社会福祉法人石井記念友愛社、1960
- 石井十次『石井十次日誌（明治二十六年）』社会福祉法人石井記念友愛社、1962
- 石井十次『石井十次日誌（明治二十七年）』社会福祉法人石井記念友愛社、1963
- 石井十次『石井十次日誌（明治二十八年）』社会福祉法人石井記念友愛社、1964

- 石井十次『石井十次日誌（明治四十年）』社会福祉法人石井記念友愛社、1977
- 一色哲「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院」『キリスト教社会問題研究』同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会 49-66, 1995
- 菊池義明「岡山孤児院の音楽岩頭（活動写真隊の活動と養護実践のかかわり—研究の目的と全体的動向を中心に—」『共栄児童福祉研究』第4号 69-121 共栄学園短期大学、1997
- 姜克貫「石井十次の思想新論 - その社会性をめぐって」『岡山大学文学部紀要』第43号, 114 - 144, 2005
- 室田保夫「石井十次と東洋救世軍」『キリスト教社会問題研究』第46号 95-131 同志社大学、1998
- 岡山孤児院『岡山孤児院月報』第一号, 1893 (M26) 年8月15日
- 岡山孤児院『岡山孤児院月報』第四号, 1893 (M26) 年11月20日
- 奥中康人『国家と音楽』春秋社、2008
- 奥中康人『幕末鼓笛隊（阪大リーブル037）』大阪大学出版会、2012
- 小野修三「明治日本における石井十次と救世軍に関する一考察」『慶応義塾大学日吉紀要 社会科学 (22)』74-52, 2011
- 三枝まり「多様化する吹奏楽」『日本の吹奏楽史 1869-2000』【27-54】青弓社、2013年
- 上野正章「明治期末の松江市における音風景について—楽隊の普及との関連から—」『日本伝統音楽研究』第7号 京都市立芸術大学 17-35, 2010
- 都賀城太郎「スクールバンドと吹奏楽の普及」『日本の吹奏楽史 1869-2000』【59-87】青弓社、2013年
- 山本浩史「石井十次の教育思想における真正の教育の成立過程—明治二七年ルソーの影響を中心に—」『社会福祉学』第51巻 第4号, 2011
- 山本美紀「『人間教育』と音楽の力— 讃美歌に託された神学と教理—」『人間教育学創刊号』人間教育学会 39-45, 2014
- 山本美紀『メソヂストの音楽— 福音派讃美歌の源流』ヨベル社、2012年
- 山室軍平『私の青春時代』救世軍出版及供給部、1929
- 山室軍平「石井十次とわたし」『石井十次伝』石井記念協会、422-444, 1987（復刻）

〈注〉

- 1 この点において、風琴音楽隊となるのはもっと遅い。
- 2 室井は「ここには『軍隊の喇叭隊』とあり救世軍様式が窺え、後の音楽隊の萌芽を想起させるものである」としている。(室井 1998, 110)
- 3 訳者注によると、邦文『救世軍歌集』74 番 チャールズ・ウェスレー作詞 (『最暗黒の英国とその出路』 p.230

- 4 この「桑木主義」とは、山本によれば「桑の木を不自然に刈り込んで失敗したが、自由に放任し成功した経験からヒントを得たとされている (山本浩史 2011, 20)。
- 5 [1964 (M27) 年6 楽 13 日付]「(二) 小野田君 一運動と音楽とは心を清くする方法なりと勧めらる」(石井十次『石井十次日誌 (明治二十七年)』社会福祉法人石井記念友愛社, 170, 1963)

〈資料：年表〉

年号	和暦	日付	年齢	項目(石井十次)	項目(基督教)	項目(社会)
1865	慶応元年	4月11日	0	出生:宮崎県児湯郡上江村馬場原(現・宮崎県高鍋町)		4月7日に、元治→慶応に
1866	慶応2	12月				日本人が専門的な音楽レッスンを初めて受ける:フランス式
1869	M2					薩摩藩音楽伝習隊(日本初の西洋式吹奏楽団)編成:フェントン(イギリス式)→現代の陸海軍音楽隊の前身
1872	M5	8月3日				学制頒布。小学教科・中学教科の最後に「唱歌」と「奏楽」(但し、「当分之ヲ欠ク」)
1878	M11		13		伝道会社設立 金森通倫、岡山教会着任	
1879	M12		14		ペリー、ケリー、ベター「岡山ミッション・ステーション」着任(細井 2009,129)	音楽取調掛設置(後の東京音楽学校、減東京芸大音楽学部)
1880	M13	3月	15			音楽取調掛、ルーサー・ホワイトイング・メーソン招聘(1882M15まで)。1883(M16)年からエッケルト
1882	M15		17	岡山医学校に入学		
1884	M17					スクールバンドの萌芽:高知県海南学校(現・県立高知小津高等学校):フランス軍式生徒喇叭隊(軍事教練用)
1886	M19		21		ジョージ・ミュラー来日(年末~翌年にかけて)	
1887	M20	1月7・8日	22		ジョージ・ミュラー同志社演説会	
		9月		孤児教育会(後の岡山孤児院)創設		
1891	M24	2月20日	26	W.ブースについて初出「救拯軍のおんな将軍ブース夫人」『聖書之友』三八号(一八九一年M24)「将軍ブース氏の廃人利用策を読む」(『日誌』)		<p style="text-align: center;"><ジンタ、チンドン、市中音楽隊></p> 一八九〇年前後(明治二十年代頃)から吹奏楽で登場した市中音楽隊にはかなり質のいいものもあり、中略。ジンタ(市中音楽隊)は主に広告の町回りに使われた。中略。しかし、一九〇〇年頃(明治三十年代)になると、市中音楽隊はすっかり質が低下して低俗なジンタに陥り、中略。明治の末年頃、市中音楽隊はついに解散してしまう。(三枝まり「多様化する吹奏楽」p.33『日本の吹奏楽史1869-
		10月28日				
1892	M25	1月2日	27	石井、青木要吉よりブース『最暗黒の英国とその出路』入手。		
		5月4日		石井、山本徳尚よりブース『最暗黒の英国とその出路』を読み聞かせてもらう。山室在席		
		10月29日		「石井は九二年一〇月より、救世軍方式の野外説教を積極的に実施していくのである。」(室田1998, 110)「喇叭隊についての記述「救世軍屋間の働きの反響にして会堂以来初めての大会集なりと終わりに軍隊の喇叭隊四名君が代を奏す」(『日誌』)		

年号	和暦	日付	年齢	項目(石井十次)	項目(基督教)	項目(社会)
1893	M26	10月12日	28	ペテ一氏より寄付(岡山孤児院月報4号)オルガン購入。喇叭隊は風琴音楽隊に	<p style="text-align: center;"><スクールバンド隆盛期></p> 札幌農学校(1893:M26-) 七郷村立七郷尋常小学校:滋賀(1895:M28-) 四日市商業学校:三重(1897:M30-) 寺庄高等小学校:滋賀(1900:M33-) 山口県教育委員会(教員養成) 熊本師範学校(1903:M36-) *日清戦争前後に各地に萌芽。戦勝祝賀会、慰問演奏などに行く *他、明治期に40団体前後あったとされる。	
		8月15日		『岡山孤児院月報』発刊(8号で終了)		
		8月20日		『関声』発刊		
		10月12日		月報第4号:ペテ一氏より寄付(岡山孤児院月報4号)オルガン購入。喇叭隊は風琴音楽隊に		
		11月3日		日誌:天長節:君が代、風琴(清水君?)、忠臣の歌を誦して散会		
		11月7日		日誌:小野田君、楽器を調べて帰院		
		11月21日		日誌:吉田金太郎、1人の孤児の女の子を連れてくる。その際、東洋救世軍楽隊のために50銭を寄付		
		12月16日		日誌:オルチン来院。「キリストの生涯」の幻燈会を開く		
		12月31日		日誌:孤児院内での楽器の使用法など、報告。一月報第4号にも書いてあるとのこと		
1894	M27	3月	29	石井、ルソーを初めて古藤の訳により知る。(姜2005,136)		
		5月27日		日誌:自分が思想に感応するのは、音楽に才のある人が感応するに等しい		
		6月13日		日誌:小野田「運動と音楽とは心を清くする方法なりとすすめらる」(『日誌』)		
1895	M28	9月5日	30	ライト大佐筆記の救世軍、来日。伝道開始		
		10月30日		日誌「楽器をあたえられんために祈る可し」		
				日誌「楽器を求めべし(小野田君)」(p261)(『日誌』)		
1896	M29	8月15日	31	新報 第1号:楽隊の設立宣言「一の完全なる音楽隊を設えんとは吾人が兼ての望みなりしか中にも熱心之か為に尽くすは小野田鉄彌兄にして年来熱構計画せし處るか神はこの度数個の楽器とあまつさへ関西音楽師三谷氏まで与えられ茲に楽隊を設くることなりぬ。(『日誌』)		
1896	M29	9月15日	32	新報第3号:小野田、三谷氏、楽器購入。「プラスバンド」の文字。(8月4日)		
1907	M40	4月16日	43		ブース大将初来日。	
		5月15日		ブース岡山に来る 日誌:「とても日本人は『ブース』式には救はれぬ」		
		5月16日		ブース岡山孤児院見学 *ブースの影響から東洋救世軍の構想へ飛躍		
1909	M44	6月14日	45	「友愛社」(大阪)設立【東洋救世軍→東洋救児東洋院→友愛社(大阪)】	<p style="text-align: center;"><少年少女音楽隊の活動開始></p> 三越少年音楽隊:東京(1909:M42-T14) 三越少年音楽隊:大阪(1912:T1-1926:T15) 出雲屋少年音楽隊(1923:T12-1926:T15) いと呉服店少年音楽隊(1911:M44-) 高島屋バンド:大阪(1923:T12-?) 高島屋少年音楽隊(1924:T13-?) 白木屋少女音楽隊(1912:M45-?)	